

## 第十二話 本のために家を建てました（続き）

### ●フローリングの床は重さに弱い

母親に「本に殺される！」と悲鳴を上げられ、古い二階建て木造家屋を壊し、新築することになった大学職員のNさん。本をいかに美しく、効率よく収納するか。住み心地より「本」優先の家の設計を依頼された建築家の杉浦充さんは、大手ゼネコン時代も、独立して個人で事務所を構えるようになって、これだけ「まず本ありき」の発想で家を設計することはなかった。

「本は何といっても重い。ふつう、家を建てる場合、床の積載重量（床に負荷がかかる重さの許容範囲）をだいたい一平米当たり一八〇キログラム以内、と見積もります。ところが、本棚にびっしり本を並べると、軽くその倍はかかる。細かい数字は避けますが、そのため、基礎の構造計算がまったく別のものになるんです。加えて、強風、地震、積雪なども、その数字に加味しなければならない。通常より『硬い』設計になる。その分、鉄骨の強度とかを上げなければならぬので費用は余計にかかりますね」

本棚も特注の作りつけだったから、基礎の強度も含めて、本がない場合と比べて、数百万円も余計に費用がかかったようだ。

建て替える前のN家は木造で、Nさんが本を溜め込んだ部屋は二階にあったから、杉浦さんが見るところ、それは「危険な状態」だったという。

「木造二階家の特に二階は、ほとんど本を溜め込むのには適さない、と考えたほうがいい。段ボールに本を詰め込んで、それを部屋に積むというのはもっと危険で、想像以上に過重がかかっている。下が畳の場合は、畳がクッションになって、床がわたんでも多少荷重を吸収しますが、フローリングの床が意外に重さに弱い」

本が意外に重いということは、身をもって知っているはずだが、五百冊、千冊単位になったとき、それがどれぐらいの重さになるかを知っている人は少ない。大雑把に四六判の単行本の十両を四百グラムとして、コクヨのスチールの本棚五段に収納できるのが約百七十冊。それだけで六十八キログラム。前後二段に並べるとその倍。本棚そのものの重量が別にかかる。

木造二階家時代のNさん宅は鉛でできた殻を背負ったカタツムリみたいなものだった。

### ●「こんな家を建ててはいけない」

さて、家を建て替えることを決めて、杉浦さんと話し合いを続けて二年、いよいよ古い家とおさらばする時が来た。建て替えの間、別に親とNさんが住む家を借りなければいけない。いや、あと大量の本も一緒に引越した。

「それが、うまい具合に、ウチから五軒ぐらい先へ行ったら、廃業した米屋があ

ったんです。そう、ウチと同業です（笑）。早くに廃業して、五年ぐらい貸し出し中で、借り手が見つからなかった。そうです、下が店舗になっていて、ウチと基本、同じ。近いから引越しも楽だし、結局、そこを借りることにしました」

引越し先の旧米店の店舗部分を、そのまま倉庫にして、蔵書を積みあげて行った。業者に頼んだりせず、台車を使ってコツコツ運んだという。

「荻原魚雷さんの古本エッセイ『古本暮らし』（晶文社）を読んでいたら、魚雷さんがしょっちゅう引越しをしていて、本を詰めるのには、二リットルのコココーラのペットボトル六本入りが、ちょうどいいサイズだと書いているのを読んで、真似しました」

それまで分散していた蔵書を段ボールに押し込んで、仮の住まいとなる旧米店の店舗部分に次々と積んでいった。「外へ出して、一箇所に集めてみると、よくこれだけの量が、あの家に入っていたものだ、と感心しました」とNさんは感慨深げに言う。感慨深いのは当人だけで、家族から見たら、段ボールが積みあがった山に怖れをなしただろう。

十カ月後、二〇〇七年十二月、いよいよ「本の栖」が完成した。

Nさんの新築住宅も、一般客が自由に訪れてみてもらえるオープンハウスが行われた。その時のこと。多くの人が、図書館みたいな部屋に感嘆の声を上げるなか、近所に住む一人のおじいさんだけ反応が違った。そこにいた建築家の杉浦さんに詰め寄って、こう言ったというのだ。

「あなたは間違っている。こんな家を建てると（施工主が）言ったら、あなたが諫めて、もっとちゃんとした家を建てろ、と言うべきだ。それが建築家だろう」

これには、杉浦さんも、一緒にいたNさんもまいった。本好きにとっては、壁面が本で埋めつくされた家は夢の城でも、本に興味のない人にとっては大いなるムダに見えたのだろう。

## ●本に合わせすぎたための失敗

竣工の前に、Nさんが寸法を指定した本棚が搬入される日があった。

杉浦さんの見るところ、家の竣工の日より、そっちの方がNさんは興奮しているようだったという。

本棚の設計は、背の高い単行本、新書、文庫と高さを計って寸法を出した。決められた高さのなかで、なるべく多く、本を並べたかった。下六段を単行本、上三段を文庫本にするなど、収納の効率を考えた。

「それで一つ失敗したことがあるんです」とNさん。Nさんはミステリの大ファンで、ミステリ文庫が大量にある。文庫は各社ほぼ同じサイズで、一段の本棚の高さもそれに合わせて作った。ところが、ハヤカワミステリ文庫のサイズが、二〇〇九年より少し背が高くなった。微増ではあるが、Nさん宅の文庫棚にはそのために収まらなくなってしまったのである。

「棚を可動式にすると、棚がたわんだり、地震のときなども心配で固定式にしたんです。だから、いまさらどうしようもない。新書のところは満杯だし、困ってしまいました」

そうは言っても、とにかく男の夢の実現である。毎日、本に囲まれた暮らしに不満があるはずもない。

新築なって四年、その間に知り合いや友人が「本の栖」を訪ねたが、反応は二つに分かれるそうである。本好きの同志は、入るなり歓声を上げ、羨望を込めて「すごい！」と言う。本に興味のない人も「すごい」と一応言うが、その声にまったくうらやましいという気持ちは込められていないそうだ。

一万五千冊をたっぷり収納できるスペースを得て、これで打ち止めと行けばいいが、欲しい本は次々出るし、溜まる一方。

「去年、ちょっと考えて、古い本を大量に処分しました。基準は、もうこの先、読まないだろうと思う本。それと、いまの自分の趣味に合わない本も抜き出して、スリムアップした。キッチンには料理本専門の本棚があるんですが、それも満杯なので、厳選することにしました」

それでもなお、本は増えていく。二階に寝室があつて、そこは見せてもらえなかったが、本棚はないそうだ。寝室にだけは本をおくまい、と決めていたそうだ。しかし、現状はそうも言っていられなくなった。今では不可侵だった寝室へも本棚を置くことを考え始めている。

「どうせ置くなら、市販のものより、統一して同じ本棚を置きたいじゃないですか。そこで、杉浦さんに相談したら、こう言うんです。『そろそろ、言ってくる頃だと思っていました』って（笑）」